第１章

通常の学級における発達障害児等への指導・支援
～ユニバーサルデザイン的な授業の実践化に向けて～

通常の学級には，いろいろな面で配慮すべき子どもがいます。その中にあって，発達障害のある子どもに対して，どのように指導・支援したらよいのか，という声が多く聞かれます。

わたしたちは，「集団での指導が困難であるから，集団とは別に個別の指導・支援を」と考えたり，あるいは，学級集団を意識せずにその子どもだけに焦点を当てて，「その子どもの気になる部分を改善するための指導・支援はどうしたらよいか」と考えたりしがちです。

しかし，このような考え方で子どもを指導していくと，集団での指導が難しい子どもが次から次へと気になったり，あるいは，その子へいろいろな働き掛けをしても，「気になる部分」がなかなか改善されなかったりする傾向があります。

第１章では，通常の学級での次の事例を紹介します。

１　全員が力を発揮し，輝く学級づくり
２　全員が楽しく「わかる・できる」授業の工夫
３　学級集団の中での個別の配慮
４　通常の学級への入り込みの指導・支援

上記の３「個別への配慮」と４「入り込みの指導・支援」は，集団の中での特別な支援を必要とする発達障害の子ども，個に焦点を当てての指導・支援です。それに対して，１「学級づくり」と２「授業の工夫」では，その子どもを取り巻く周囲の環境等に焦点を当てて，個への働き掛けの土台となる集団全体への指導・支援について示しています。

通常の学級における発達障害のある子どもへの指導・支援は，日常的な学級づくりや日々の授業改善なくして，有効にしていくことは不可能です。まずは，学級づくりや日々の授業改善や工夫を心掛け，その上で，その発達障害等のある子どもに焦点を当てた指導・支援をしていくように心掛けたいものです。

第１章の１

全員が力を発揮し，輝く学級づくり

発達障害等がある特別な支援が必要な子どもが，充実した学校生活や学級生活を送れるかどうかは，その学級集団がどのような状態であるかに左右されます。

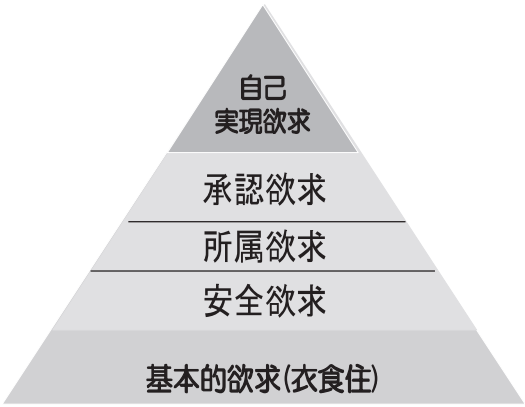
学級集団としての規律に欠けていたり，互いの関係性がよくなかったりすれば，発達障害等のある子どもが安心して学校生活，学級生活を過ごすことは困難であり，障害がより顕在化する傾向にあります。

よりよい学級づくりの中で，親和的で許容的な集団となっていけば，発達障害のある子どもも周囲に支えられながら，本来の自分の持っている力を発揮できるようになります。

ここでは，よりよい学級づくりの参考となるように，次の事例を挙げました。

事例１　「安心感と関係性が高まる学級を願って」～小学校低学年における学級づくり～
事例２　「違いを認め合う学級集団を目指して」　～小学校高学年における学級づくり～
事例３　「集団としての規律と自立的・主体的な取組を大切にしながら」
～中学校での学級づくり～

これらの事例を挙げた基本的な考え方は，右の図の「マズローの欲求階層説」に基づいています。



子どもが満足した学校生活を送るためには，まず，家庭での衣食住を中心にした基本的欲求が満たされている必要があります。

そして，その家庭生活が満たされることをベースにしながら，まずは，学校，学級での安心・安全の欲求が満たされることが大切です。特に，小学校低学年では，こどもが安心して学級で過ごせたり，自分らしさを発揮できたりすることを大切に考え，小学校低学年の事例１を挙げました。

小学校高学年になるに従って，集団と個との関係が意識されやすい傾向にあると考え，所属欲求や承認欲求を意識して事例２を挙げました。

中学校において，所属欲求・承認欲求の上に，自己実現欲求が満たされることが求められますが，所属している学級の規範意識が，教師のリーダーシップにより維持されているのでは，不平不満が強くなったり，活力に欠けたりする傾向が強くなります。そこで，子どもたちが自治的集団に成長するように支援していくことを大切に考え，事例３を挙げました。

小学校の低学年から中学校の事例まで，ある程度の発達段階を意識して事例を挙げてありますが，どの段階であっても，教師と子どもの信頼関係がベースとなります。まずは，目の前の子どもをまるごと受け入れ大切にする中で，一人一人の子どもと教師との関係づくりを意識したいものです。

事例１　安心感と関係性が高まる学級を願って

～　小学校低学年での学級づくり　～

「友だちとトラブルが絶えない」「短時間でも姿勢よく座って話が聞けない」…等々，集団生活の中で配慮を要する子どもたちは，小学校の低学年に少なくありません。
このような子どもたちと一緒に学ぶ学級で，「教師の意識の変革」「子どもたちへの声掛けの工夫」を大切に考えて取り組んだ学級づくりの実践を紹介します。

◇問題行動が減らない・・悪循環の日々

ショウさんは，何にでも興味や関心を示す明るく元気な１年生の男の子です。５月に入り周りの子どもたちが落ち着いて学習に取り組み始めると，見えたもの聞こえたものすべてに反応してしまうショウさんは，とても気になる存在になっていました。外で救急車のサイレンが聞こえると離席して窓から身を乗り出したり，隣のエミさんの消しゴムが気になって，とっさに取り上げたり・・・。

学級担任のナカムラ先生は，１０分と席に着いていられないショウさんに対し，「この子はどうして他の子と同じにできないのだろう」「私の注意が足りないのかも…」と考え，いけないことに対して叱責や指示が自然と増えてきました。しかし，期待する姿とは逆に，担任の顔を見ると逃げたり，反抗したりするようになっていきました。

「困った子」「手のかかる子」として見ていると，ショウさんの行動のほとんどが問題行動に見えてしまいます。そんなナカムラ先生の見方をまね，周りの子どもたちも，皆と同じ行動ができないショウさんを「困った子」と見るようになり，「先生，ショウさんまたお掃除やらないでぶらぶらしてたんだよ」「ショウさんに注意したら蹴られたよ」「ショウさんが・・・」などの訴えが飛び交うようになっていきました。

◇「困った子」から「困っている子」へ　～教師の意識の変革～

ショウさんへの叱責は増え，ある日，ナカムラ先生は，「どうしていつも迷惑かけるの！」といつもより強く叱ってしまいました。すると，いつもはふてくされるショウさんが急に泣いて怒り出しました。「ぼくだってやだ！先生もみんなもぼくをいつもいじめてばっかり！」荒々しく吐き出されたショウさんの言葉を聞いた時，ナカムラ先生はハッとしました。困っていたのは実はショウさん自身だったと初めて気が付いたのです。

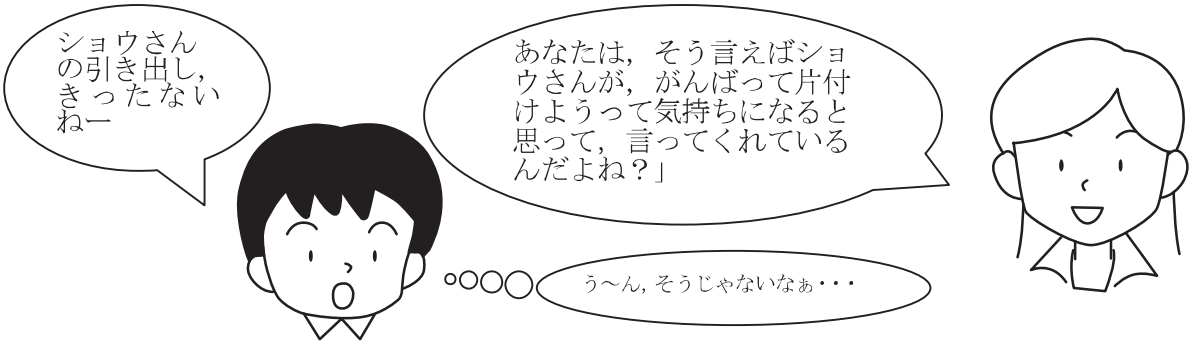
指示を耳から聞いて理解することが難しいショウさんにとっては，何をすればいいのか分からないでいるところで急に叱責されたら不安感が募ります。周りの子から何度もうるさく注意されたら不快感は増し，トラブルにつながるばかりです。

先輩の先生からの助言もあり，このことに気が付いたナカムラ先生は，ショウさんにとって居心地のよい学級は，優しい言葉が行き交う，誰にとっても居心地がよい学級のはずだと考えました。ショウさんの目を通して学級を見てみると，自分勝手に見えていた言動も，何らかの理由があることが分かってきました。その時に抱いた感情を正直に表出するショウさんの気持ちが安定するように意識していくことは，学級の人間関係の質を高めることにつながっていきます。ショウさんを，学級の今の状態を映し出す「鏡のような存在」として見ることができるようになってくると，言葉の掛け方が変わり，ショウさんの反応も変わってきました。

◇子どもたちへの声掛けの工夫

ナカムラ先生は，ショウさんに対し「聞きなさい」ではなく「話を聞いてくれたらうれしいな…」と，ショウさんが自分で意思決定ができるような声掛けをするようにしました。よい意思決定ができた時は必ず「ありがとう」と感謝の言葉で伝えるようにすると，注意しなければならない場面をほめるチャンスに変えることができました。スモールステップで具体的に分かりやすく伝えることで，ショウさんのできることが増えると，自然に周りの子どもたちからも，「すごい！ショウさん」とショウさんを称賛する声が増えていきました。

また，周りの子どもたちには，ショウさんへの言葉の掛け方について，「そんな言い方はだめ」と言うのではなく，自分で気持ちを振り返られるような声掛けをするようにしました。



特に，ショウさんとトラブルになることが多い子には，トラブルになってから指導をするより，「あなたがああ言ってくれたから，ショウさん怒らずに続けられたんだよ。ありがとう」と子どもの無意識な言動の中にあるよさを言葉にして伝えていくようにしました。ついショウさんにばかり担任の目は向きがちですが，ナカムラ先生は，「いつもショウさんのことを考えるようにしてくれているところ，見ているよ」というサインを周りの子どもたちに伝えるよう心掛けました。そのような中で，子どもたちもショウさんとのかかわりにおいて，我慢するのではなく，徐々に「役に立てることがうれしい」という気持ちになっていきました。

◇ショウさんの存在によって成長した子どもたち

やがて２学期に入り，運動会の練習が始まりました。

運動会の練習では校庭の中を移動して整列する場面が多く，ショウさんも一生懸命やろうとしてもどこに並んだらいいのか分からず，次第に投げやりな様子になっていきました。

「みんな赤白帽子をかぶって，同じ運動着を着てるから，ショウさんは誰が誰だか分からなくなって前の人を見失っちゃうのかな」とナカムラ先生が皆に説明した次の日のことです。ショウさんの前に並ぶハヤトさんが，登校するなり，「先生，これならショウ君すぐにぼくを見つけられるかなぁ」と，自分の紅白帽子を差し出しました。紅白帽子の後頭部の部分には，赤いマジックで書いた大きな四角い枠の中に，自分で書いた『ハヤト』の文字。

その後の練習では，「ハヤト」とつぶやきながら，大きな『ハヤト』の文字を目印に最後まで取り組むショウさんの姿がありました。

事例から学ぶ

子どもは誰でも個性的であり，長所や短所があります。「困った子」ではなく，「困っている子」と担任が子どもを見ることにより，子どもたちの友だちへの声の掛け方や見方が変わってきます。子どもの温かな声掛けに対して，感謝の言葉を伝えていくことで，安心感が持て，人間関係が深まる学級となっていくのではないでしょうか。

人とのかかわりの中で，誰かの役に立っているという満足感は自信を高め，更なる成長を促してくれます。お互いが支え合い，自分の持っている力を発揮していこうという意識づくりを大切にしていきたいものです。

事例２　違いを認め合う学級集団を目指して

～　小学校高学年における学級づくり　～

５年生のヤマダ先生の学級では，思春期にさしかかった子どもたちが，以前は気にしなかったことも気にするようになり，低学年の頃とは違った形でトラブルが起きやすくなりました。そんな中，「どうしてあの子はみんなと同じことをしないんだろう」と，周囲の子どもたちから不思議に思われることが多くなったタケシさん。学級の中で孤立する子どもを生まないために，相手の気持ちを考えるような声掛けを行うとともに，「違いを認め合える学級づくり」を心掛けた事例を紹介します。

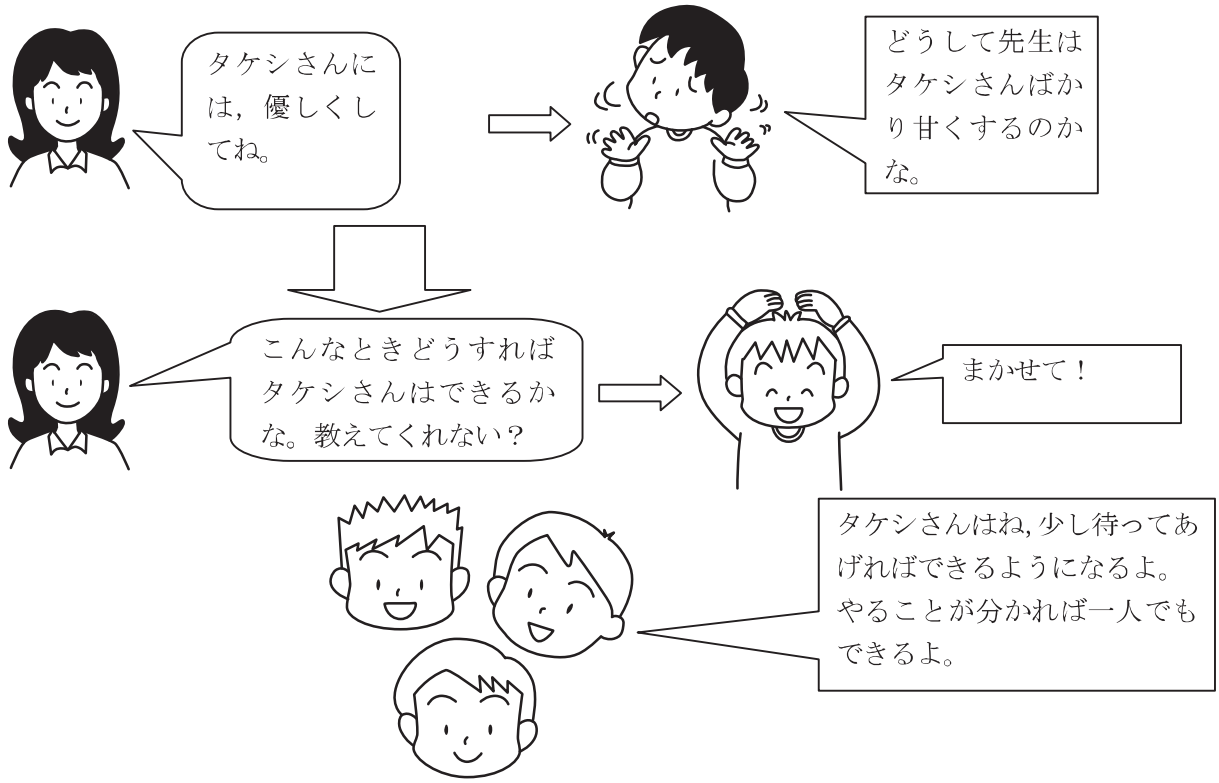
◇　勝ちにこだわるタケシさん

タケシさんはサッカーが大好きですが，勝ち負けへのこだわりが強く，自分のシュートが決まらなかったりチームが負けたりすると，泣いて座り込み，とても落ち込んでしまいます。校庭に座り込んだまま１時間以上も動かなかったこともありました。周囲の友だちは，そんなタケシさんの行動が理解できず，「負けてもそんなに落ち込むことないのに」「次の時間の授業に出ないなんておかしいよ」と言って，タケシさんを非難することが多くなっていきました。

◇　相手の思いを考えるための声掛けの工夫

タケシさんは，広汎性発達障害と診断されています。担任は診断名と障害の特性を分かっているので，タケシさんの言動に寛容になれますが，周囲の子どもたちは，障害にかかわることは知らないためなかなか寛容になれません。

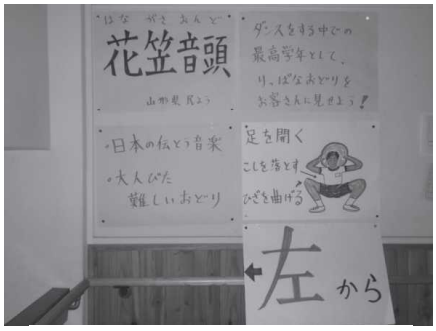
そこで，学級の子どもたちに，タケシさんの長所や特性，タケシさんが今，頑張ろうとしている目標を紹介する場を設けました。また，教師から一方的にタケシさんへの接し方を話すのではなく，その都度子どもたちに尋ね，引き出すようにしました。すると，次第に学級の子どもたちは，タケシさんの気持ちを推察しながら，自分自身の具体的な行動を考えるようになり，タケシさんのよいサポーターとなっていきました。



◇　違いを認め合える学級集団を育むための支援

この学級には，タケシさんのほかにも，様々な配慮が必要な子どもが複数いました。そこでヤマダ先生は，「一人一人の違いを認め合う」ということに重点を置いた学級経営を行いました。道徳の時間に，自分の長所と短所を発表し合ったり，友だちの長所を挙げてその人に伝えたりする授業をし，誰もが長所と短所の両方を持ち合わせていることを確認しました。また，エジソンや坂本龍馬の話も挙げて，子どもの頃はうまく力を発揮できなかったけれど，長所を生かして人々のためになる活躍をした人物について学習しました。こうした中で子どもたちは，「友達一人一人を大切にして協力し合えるクラス」という学級目標を決め出していきました。

また，個人差の大きい学級なので，学校生活のすべてについて全員に同じことを求めるのではなく，一人一人が自分のもてる力を精一杯出して取り組めるように，「個への配慮が普通にある教室」を，ヤマダ先生は目指しました。



【運動会ダンスの視覚支援】

【一人一人が精一杯取り組むことができるための個への配慮例】

宿題・・・２種類の宿題を用意し，Ａの宿題は学級の全員が行う宿題，Ｂの宿題は余力のある子どもが行う宿題としました。こうすることで，学習の得意な子，不得意な子，双方に対応できるようにしました。Ａの宿題に一人で取り組むことが難しい子どもには，本人や保護者と相談しながら，更に個別に対応しました。

運動会のダンスや組体操・・・言葉だけの指示でなく，体の動きや隊形を絵や図に描いて視覚的に分かりやすくしました。周囲の様子に気づかず，全体の動きから遅れがちな子どもについては，その子に注意するのではなく，「気づいた友だちが教えてあげてね」と，周囲の子どもに声を掛けました。組体操では，必要に応じて教師がサポートに入り，支援の必要な子どもと一緒に演技しました。

日記・・・書くことに困難さをもつ子どもには，パソコンのワープロソフトを使って日記を書いてもよいことにしました。そして，パソコンで打ち込んだ日記を印刷して，日記帳にはり付けるようにしました。

学習プリント・・・国語の漢字学習や作文で使う学習プリントは，通常のマス目のものの他にマス目が大きめのものも用意しておき，子どもが自分で選んで使えるようにしました。

更にヤマダ先生は，一人一人の違いを認め合えることに重点を置いて学級経営をしていることを，学級通信や学級懇談会で保護者に伝えるようにしました。このことにより，学級における教育の方向性を保護者と共有できるようになり，保護者と共に教育活動を進めることができました。

事例から学ぶ

特別な支援を必要としている子どもが，教室で生活しにくい環境になってしまっていることはないでしょうか。すべての子どもたちが学級で生活しやすくなるために，困っている子どもの気持ちを推察する声掛けを周囲の子どもにすること，そして，違いを認め合う学級づくりを進めることが大切だと思います。その中で，すべての子どもに一斉一律な形を求めるのではなく，「個への配慮」が当たり前に存在し，「みんな違ってみんないい」と許容し合える集団をつくっていきたいものです。

事例３　集団としての規律と自立的・主体的な取組を大切にしながら

～　中学校での学級づくり　～

２年生から担任になり，学級の規律を整えることに力を入れてきたハラ先生。学級は全体的に落ち着いているものの，クラスの活気が足りないことを少しずつ感じ始めました。３年生になったことを契機に，Q-U 検査の結果を参考に，教師のリーダーシップによる指導から転換し，子どもの自立的・主体的な動きを支援するように努力しました。指導の方向を転換しての学級づくりの取り組みを紹介します。

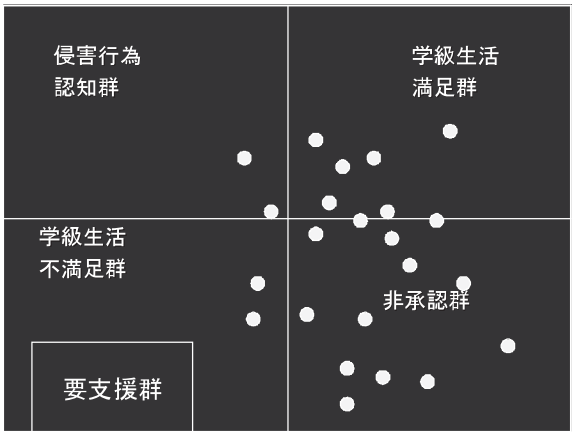
◇　日常生活の規律を整える

クラス替えがあり２年１組の新たな担任となったハラ先生。初任の頃，先輩の先生から助言された「提出物」「給食指導」「清掃指導」を大切に考え，これまで学級経営を行ってきました。新たな学級においても，改めてこれら３つのことを意識し，次のような指導を実施しました。

- 毎日，生活記録を提出するよう求め，丁寧に赤ペンでやり取りをする。未提出の子どもは，給食前までに別用紙による提出を求め，常に全員が提出するようにする。
- ４校時が終わると，すぐ教室に行き，給食当番の身支度や給食準備の協力の状況等確認し，必要な指導をその場で行う。
- 清掃時間中は，すぐに身支度をして前半はクラスの掃除を子どもとともに行い，後半は，学級のすべての掃除分担を回り，それぞれの清掃の取り組みについて指導する。

このように３つのことを窓口にきめ細かな指導をする中で，ハラ先生のクラスでは，提出物や授業の移動等全体的に規律が守られ，教科担任の目からもまじめで落ち着いたクラスとなってきました。ところが，気になる部分も出てきました。

全体的にまじめで落ち着いているけれど，活気が足りない気がするなあ。2 年生秋の Q-U 検査でも，分布が全体的に右側で縦伸びしているし，こういうのを管理型学級っていうのかなあ。もっと，子どもとの関係性を大切にしたり，小グループでの活動を取り入れたりした方がいいみたいだな。ときには，もっと子どもに任せるようにしていこう。



【Q—U 検査のイメージ】

◇　教師と子ども，子ども同士の関係性を高める

ハラ先生は，3 年生になって，子どもとの関係性や子ども同士のつながりを高めようと，次のようなことを行いました。

生活記録でのやり取り以外に，頑張っている部活やテレビドラマのことを話題にするなど，日常的なちょっとしたやり取りを意識して行うようにしました。また，自分の学生時代等の失敗談や叱られた体験など，あえて話すようにしました。

更に，クラスでの学級活動等の際「構成的グループエンカウンター」「対人関係づくりゲーム」の要素を取り入れ，楽しい活動や小グループでの活動を増やすようにしました。

また，以前から大切にしていた「提出物」「給食」「清掃」において，気になる部分を注意することから，取り組みのよさを認めることを増やすように意識しました。このことにより統一的ではなくなった部分も若干ありましたが，多少の幅があってもよしと考えることにしました。なぜなら，以前よりもクラスが明るく活気が出てきていることをハラ先生が実感し，教室に心地よさを感じるようになってきたからです。

◇　音楽会に向けて，子どもを信じ，取り組みを支える

●　指導の方向の転換

２年時の音楽会では，ハラ先生は自らリーダーシップを発揮してクラスを導こうとしましたが，歌声もさみしく，審査発表の際，受賞もできず，悲しい思いをしました。ハラ先生にとって，教師主導の指導の限界を感じた音楽会となりました。そこで，３年時の音楽会では，以下のような転換を図ることにしました。

【2年のとき】
「大きい声で歌わせる」
「よい表情で歌わせる」

→

【3年のとき】
「自ら歌い，表現する」
子どもを信じ，任せ，
その動きを支える。

→

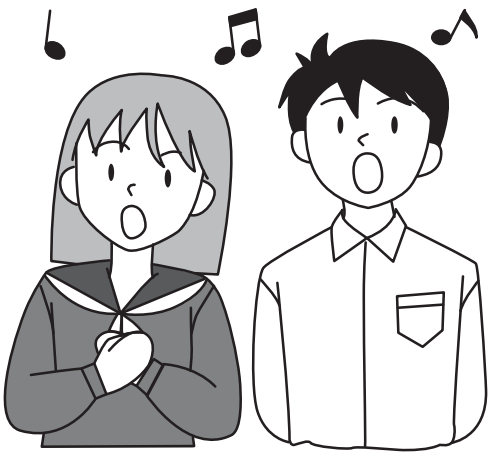
【そのために】
・はじめに願いを伝える。
・よさを広める。
・陰で子どもを支える。
・子ども同士をつなげる。

音楽会の３ヶ月程前，吹奏楽部部長のナオキさんに相談しました。ナオキさんは，「大丈夫。任せて」と，自分が指揮者をやること，パートリーダーを自分に選ばせてほしいことをハラ先生に伝えました。夏休みが明けると，ナオキさんは，帰りの会で，朝や放課後にパート練習を始めることを提案しました。すると数人から「えっー」「うっそー」などのささやき声がもれました。ハラ先生は，「今年が最後の音楽会であること」「クラスが一つとなって頑張る体験，熱い思い出にしてほしいこと」「今年はすべて君たちに任す」と思いを込めて語りました。

●　子どもの動きを支える

朝８時からの練習という約束でしたが，初日，学級の半分程度しか集まりません。放課後の練習も帰ってしまう人が多くいます。ハラ先生は以前なら注意するところを我慢して，常に練習に参加し，一緒に歌うようにしました。練習で人がそろわなくても，パートリーダーは繰り返し練習しました。ハラ先生は，全員の練習参加を願い，元気がよくムードメーカー的なアキコさんに相談しました。放課後，アキコさんをはじめ，数人の女子が，帰ろうとする友だちに声を掛けます。「〇〇ちゃん，練習，出て行く？　用ある？」「おい，ショウタ，まさか，帰らないよねえ。えっ，帰るの？信じられねえ」あちこちで，こんな明るい声掛けが始まり，朝，夕ともに参加者の数が増え，徐々に学級のまとまりが出てきました。

そんな中，ハラ先生は，気になっていることがありました。それは，２年生の冬くらいから，教室には来ず別室で学習している不登校傾向のマキさんとユミさんのことです。ハラ先生は，その子たちと比較的仲のよい数人の女子に，練習に誘ってみるよう促しました。ある朝，それらの女子が，二人を誘いに行くと，二人が教室にやって来ました。一瞬，



驚きの空気が流れましたが，ある女子が，「マキちゃん，ユミちゃん，ここだよ」と声を掛け，練習が始まりました。この頃から，ショウタさんを含めてあまり練習に参加しない男子３名も，急に顔を出すようになり，クラスがそろうようになりました。ハラ先生は，「全員がそろって，うれしいこと」「一人一人がクラスの大切な一員であること」「みんなが一つになってハーモニーを創り出したこと」等を，学級通信でその都度，伝えました。

全体での練習が始まりました。指揮者のナオキさんは，張り切って，「この歌詞は，やさしく」「ここからだんだん強くしていって，この歌詞で爆発するように」と指示を出しながら，自ら歌い見本を見せ，指導していきます。歌は目を見張るようによくなってきました。しかし，「テノール，ここを意識しないと歌にならないよ」「しっかり口開けて」「気持ちを出してくれよ」と強く言うことも増えてきました。指揮者のナオキさんは時折，「もう，やってられねえ」と愚痴をこぼしました。ハラ先生は，ナオキさんを励ますと同時に，クラスから孤立しないように，数人に「もし，悪く言う人がいたり孤立しそうになったりしたときは，『ナオキだって，一生懸命やってるし，家でも毎日練習してるんだ』って支えてやって」と依頼しました。また，ナオキさんに注意されて不満をあらわにする子どもにかかわって，仲のよい子どもに，「怒ったりいじけたりしたらなだめてやって」と密かに依頼しました。不登校傾向の子どもには，関係のある子どもに常に寄り添うように促しました。「子ども一人一人が孤立せず，友とのつながりをもてるようにすること」「子ども自らの動きをサポートすること」という二つのことに徹底して取り組みました。

朝７時からの練習に加え，休日も学校に集まり練習してきた３年１組。文化祭の最後，音楽会の成績発表が行われました。体育館には暗幕がかかり，スポットライト二つだけが，ゆっくりいろいろなものを照らし出します。「はじめに銀賞を発表します」「〇年〇組」と発表されるたびに，「きゃあー」「やったあ！」という歓声が会場に響き，会場が高揚していきます。「続いて，金賞の発表です。はじめに，最優秀賞を発表します」会場がシーンと静まりかえります。

「３年１組！」　直後，会場からは，絶叫とも思える声が響き，抱き合い，ハイタッチし合う生徒たちがスポットライトに照らし出されました。ハラ先生は薄暗い中で，思わず，「よっし！」と声を上げ，密かにガッツポーズを作っていました。

●　音楽会を振り返る

ハラ先生は，音楽会に向けた練習が始まった頃，歯がゆさを感じたことが何度かありましたが，子どもと共に練習する中で，子どもの思いを感じ，練習への取り組みに尊敬の念を抱くようになりました。また，子どもたち自らが変わっていく姿に，言いようのない喜びと驚きを感じるようになりました。これは，指揮者のナオキさんに特出した能力があり，その指導にクラスの子どもたちがついていってくれたことが大きかったと感じる一方で，子どものもてる力を信じ，それを発揮できるように支えたことによるものと感じています。子どもたちも自分たちで頑張った，創り上げたという充実感が爆発した音楽会審査発表となりました。

事例から学ぶ

学級経営において，基本的ルールが不明確で規律に欠け，「なれ合い」となって，学級の落ち着きに欠けトラブルが増えてしまう。逆に，教師が細かにルールを方向付けることにより，「管理的」となって，学級がシラッーとした雰囲気になってしまう。そんなことがないでしょうか。

よりよい学級づくりのために，基本的な規律の定着を意識すること，そして，子どもと教師，子ども同士の関係性を深めていくことが大切だと感じながらも，そのバランスの難しさを感じることが多くあります。学級での「ルールづくり」と「関係づくり」のバランスについて常に意識をしながら，子どもの自立的・主体的な動きを支えていく教師の姿勢を大切にしていきましょう。